



全気象労働組合編  
**天気予報は  
 どうなっているか**

大月書店, 1988年3月刊  
 236頁, 1,500円

全気象労働組合が気象業務の技術的側面を紹介する目的で編集した出版物は「気象最前線」, 「ゆれる日本列島」に続いて本書が3冊目となった。労働組合の本であるから, その立場からの主張点があり, それが大きな柱になっているのは当然である。しかし, はじめにお断りすべきことは, この欄は学会誌の紙面上にあるので, 政治的・イデオロギー的側面に関してのコメントは差し控えさせて頂くということであろう。

直接天気予報の実務に携わっていない「天気」の読者で, 朝日新聞夕刊(東京本社版, 札幌版)第1面左下天気欄に実名入りで予報官が書いている記事を読まれて, 他の同種の記事からは得られない臨場感を感じとっておられる方は, 情報收拾能力に自信を持たれてよい。すなわち第一線の予報実務従事者のみが提供できる天気そのものおよび天気予報業務環境の迫力ある臨場感である。経験や業績の点では, 気象庁OB等の優れた執筆陣と比較すれば, 失礼ながら見劣りするかもしれないが, この臨場感(生々しい真実の意味での臨場感)に関してだけは勝負にならないといえるのである。

「天気予報はどうなっているか」の, 類書の追従を許さない特色もまたこの1点に集約できる。気象と業務内システムと人とはが絡み合う「気象の仕事」の真実(の重要な一部)が書かれており, この面に関して単行本の形では, 他にこれほどのものはないといってよい。各予報当番の実況放送的な紹介, 数値予報・ガイダンスが外れた後の予報の決断, 週間予報当番の作戦のたてかたと心境を述べた部分, 衛星センターの解析作業の実際, 強風時の高層観測ゾンデ飛揚のコツ等筆者が業務経験のある予報中枢や衛星センター, 高層観測業務の部分でも, 胸にジンとくるほどの臨場感がある。さらにこの臨場感は山岳測候所, 離島, 観測船等紹介する環境が厳しければ厳しいほど迫力を増す。しかも各執筆者にとってはページ数の制限から, 書きたいことのごく一部しか書けなかったに違いなく, われわれはこの本によって膨大な真実の氷山の一角のみを読むのである。

予報業務は無論ユーザのニーズがあつての仕事である。経済活動や科学技術の発展等によって, ユーザのニーズも変わり, その多様化・高度化が指摘されて久しい。しかし, 最前線におけるその実態について, われわれはどれほど具体的に知っているだろうか。本書の第1章「天気予報の最前線から」では, 最前線の気象と気象業務がユーザの具体的ニーズの文脈の中で生き生きと述べられていて, ここでもその臨場感に圧倒される。例えば, 北海道日高地方の3大ニーズは, 「観光」襟裳岬の霧, 昆布乾燥のための日照, 競馬馬用牧草干しのための雨の有無の予報で, 問い合わせは早朝まだ予報のできあがらない内が多いという。「ユーザあつての予報作業」という点をつくづくと考えることとなる。

ただ筆者にとってやや不満なのは, 今官民挙げて激しく進行する高度情報化の波のなかで, 自治体等の気象情報システムや気象情報産業が最前線で具体的にどう展開しているかおよびこの面で気象庁の現場はどんな問題に直面しているかに関する記述が十分とはいえない点である。本書に「天気予報はどうなっているか」という表題がつけられるのなら, この問題は避けて通れない。この点については, 第4章において, いくつかの例を引用しつつ労働組合の主張の枠組みの中で若干触れられてはいる。しかしそれだけではなく, 取り巻く環境を含めた意味での天気予報の最前線でこの問題が具体的にどのように進行しているかが, 第一線の職員によって生々しく述べられていなければならないのではないかと。つまり現在進行中の「気象情報革命」の実態が, 業務についてと同様, 最前線の臨場感で書かれていてほしかったといいたいのである。なお, 「天気」の本欄でこの点を指摘したのは, 「気象情報革命」が気象学の健全な発展のために無視できないと思うからである。

第3章の「天気予報を支える科学技術」は純技術的の説明でコメントすることもないが, 敢えていうならこの項は付録とし, 最前線の記述(第1・2章)をさらに充実した方が本書の特長を活かすことになったのではないかと思う。

繰り返しになるが, 本書の「最前線の臨場感」は貴重であり, さらに続刊(地震・火山・海洋の分野をも含めて)の刊行を期待したい。

(気象大学校 嶋村 克)